

筑波大学支援によるマレーシア政府防災関連大学院プログラムの開講

2016年9月5日にマレーシアでは初めてとなる防災関連の大学院修士プログラム（Master of Disaster Risk Management: MDRM）がマレーシア日本国際工科院（Malaysia-Japan International Institute of Technology: MJIIT）で開講した。本修士課程は、2014年12月にマレーシア北部のクランタン州で発生した大規模洪水が契機となり、マレーシア国内での防災意識の高まりを受けて、マレーシア高等教育省を通じ筑波大学・MJIIT 杉浦則夫教授、後藤雅史教授、岩本浩二准教授に組織立ち上げ支援の打診があり、2年弱の準備期間の後、設立に至った。設立には、本学が主体となった日本の大学コンソーシアム（Japanese University Consortium: JUC 26大学加盟）内の新たな防災小委員会の設置や、生命環境系宮本邦明教授が中心となったMJIITと連携したカリキュラムの構築など、京都大学支援の下で本学の多大な貢献によるところが大きい。

開講式では、Prof. Datin Dr. Rubiyah Yusof MJIIT 院長および後藤雅史マレーシア日本先端研究所（Malaysia-Japan Advanced Research Consortium: MJARC）防災研究部門長の挨拶の後、宮本教授から本プログラムの特色および概要が説明された、第一期生として15名が入学したが、政府関連機関関係者や医学関係者等が含まれ、非常に多彩な顔ぶれとなっている。

本プログラムおよびMJARC 防災研究部門は、日本-マレーシアの水災害関連の教育研究の拠点として、また将来的には東南アジアの水災害研究ネットワークのハブとなることを目標としている。そのため、マレーシア国内のメディア取材はもとより、開講式にはNHKの取材など、日本での関心も高まっている。



宮本教授による開講式挨拶



防災関連の修士プログラム開始と合わせて開催された第4回AUN/SEED-NET自然災害会議での集合写真（左から：岩本准教授、Zuriati教授、後藤教授、宮本教授、辻村教授、杉浦教授）